

図書館資料の電子化に思う

オオスミ キヨハル
附属図書館長 大隅 清陽

今年の4月から附属図書館長となりました大隅清陽です。普段は教育学域の生活社会教育コース・社会科教育系というところで日本史を担当しています。1997年に本学に赴任して以来、附属図書館にはいつもお世話になってきましたが、これからは館長として、利用者の皆さんと館の運営とをつなぐ立場となりました。館報『やまなし』に掲載された歴代館長の就任あいさつを拝見すると、多くの方が、ご自身のこれまでの図書館との関わりについて述べておられますので、私もその前例に倣いたいと思います。

私は1982年に東京大学教養学部文科Ⅲ類に入学し、1984年に本郷の文学部国史学科に進学して以来、1993年に就職するまでの間、東大の各所に設置された図書館や図書室を利用してきました。大学に限らず、当時の図書館の目録は、蔵書の書誌データが、葉書より一回り小さな厚紙に一点ずつ記入されたカード目録でした。閲覧室には、このカードを、著者名、件名、分類などで順番に納めた小さな引き出しが並んだ木製の棚があり、利用者は、お目当ての図書がありそうな引き出しのカードを順に繰って図書を探します。探しているカードが見つかる、請求記号などをメモしてから書架やカウンターに行き、現物を手にするわけです。カードの多くは万年筆による手書きで、上記のように同じものが最低でも3枚は必要ですから、職員の方たちの労力もたいへんなものだったことでしょう。

1989年に大学院の博士課程に進学した私は、奨学金で初めてワープロの専用機（富士通のOASYS）を買いましたが、ちょうどその頃、本郷の総合図書館では目録の電算化が進み、館内の専用端末から蔵書が検索できるようになってゆきました。ただ、研究でお世話になることの多い学部の研究室や、学内の研究所などの図書室の目録は相変わらずカードでした。今回、この原稿を書くにあたって、駒場の教養学部のホームページも見てみましたが、駒場の図書館では現在でも、1986年以前に登録された図書にはカード目録しかないようで、ちょうどこの時期が、蔵書目録のオンライン化の始まりであったことが確認できます。

ただ、インターネット環境が今のように整っていなかった当時は、オンラインとは言っても、館内の端末から検索ができるだけで、カード目録と同じように、実際にその図書館に行かなければなりませんでした。各図書館の目録（OPAC）がインターネットで繋がれ、日本中のどこからでも検索が出来るようになったのは、私が梨大に着任してしばらくしてからではないかと思います。2004年には国立情報学研究所（NII）によるCiNii（NII学術情報ナビゲータ）の本格的な運用が始まり、梨大の附属図

書館のホームページからも、国立国会図書館や、山梨県内の大学、公共図書館の蔵書の横断検索が出来るようになりました。地方大学に勤務する者にとって、この変化はまことにありがたいものでした。しかし、現在でもそうですが、必要とする文献の実物をウェブで入手できることは必ずしも多くはなく、附属図書館を通じてコピーや現物の取り寄せをする必要がありました。論文については、主要な学会誌や大学の刊行物の電子化は一部で進んでおり、附属図書館のMyLibraryから文献複写を申し込んだところ、職員の方から、電子版がウェブで公開済みであることを教えていただくことも増えてきました。ただ、私の専門の日本史の場合は、特定の大学に属していない小さな学会や、既に解散して存在しない発行元も多く、必ずしも重要なものから電子化が進んでいる訳ではありません。例えば、東大に事務局がある史学会という学会は、日本で一番古い歴史学の学会ですが、会誌である『史学雑誌』に掲載された論文のPDFがJ-STAGEから入手できるのは、1976年に刊行された第85編以降に限られます。このように、図書に比べて賞味期限の短い学術論文のうち、比較的最近に刊行されたものは電子化していることもありますが、もう少し息の長い学術書となると、電子書籍化はほとんど行われておらず、紙の本を利用せざるを得ない状況が続いています。

理系のうち、特に最先端のテーマでしのぎを削っている分野の場合、研究成果も鮮度が命で、電子ジャーナルで最新の情報を入手するのが研究を進めるうえでも必須かと思いますが、個々の論文の学術的な意義はそれだけでは判断できず、その学問の体系の中に位置づけて初めて評価できるものでしょう。学問の成果の容れ物としての書物の重みや位置づけは分野によって異なるでしょうが、例えば生物学の場合には、『キャンベル生物学』や『THE CELL』といった定番の教科書が版を重ねていて、初学者はそれを熟読することから始めることは私でも知っています。

デジタルネイティブ世代である学生の皆さんにとっては、身の回りの情報はデジタル化されていて当然なのだろうと思いますが、そうなったのは、前世紀末からの20年余りの間のことにすぎません。有史以来の人類は、自ら言語を連ねることで思考し、それを書物という形にまとめあげることによって、知の体系を形作り、後世に伝えてきました。そして図書館とは、こうした書物を組織的・体系的に蓄積することによって、新たな知を創造してゆくための場を提供するものです。今日、書物の形態は紙だけでなく、電子媒体やデータベースの形をとることもあり、またインターネットやGoogleをはじめとする検索技術によって、複数の場が新たな知のネットワークとしてつながりつつありますが、それでも図書館の本質は変わりません。人類社会の知の豊かな伝統を継承しつつ、新たな知の創造の基盤となるために、大学図書館はどうあるべきか。2年間という短い間ではありますが、館長の在任中、利用者や職員の皆さんと、ともに考えてゆきたいと思っています。

